



岩波文庫

2313—2314

男やもめ

他一篇

シュティフター作
加藤一郎譯

岩波書店

昭和十五年五月七日 第一刷發行
昭和二十八年七月十日 第三刷發行

男やもめ他一篇

臨時定價八拾圓

譯者 加藤一郎

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 長野市岡田町一七六番地
田中重彌

發行所 東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三 株式會社
岩波書店

昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓
昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

亂丁本・落丁本は
お取替いたします

大日本法令 印刷・製本

岩波文庫

2313—2314

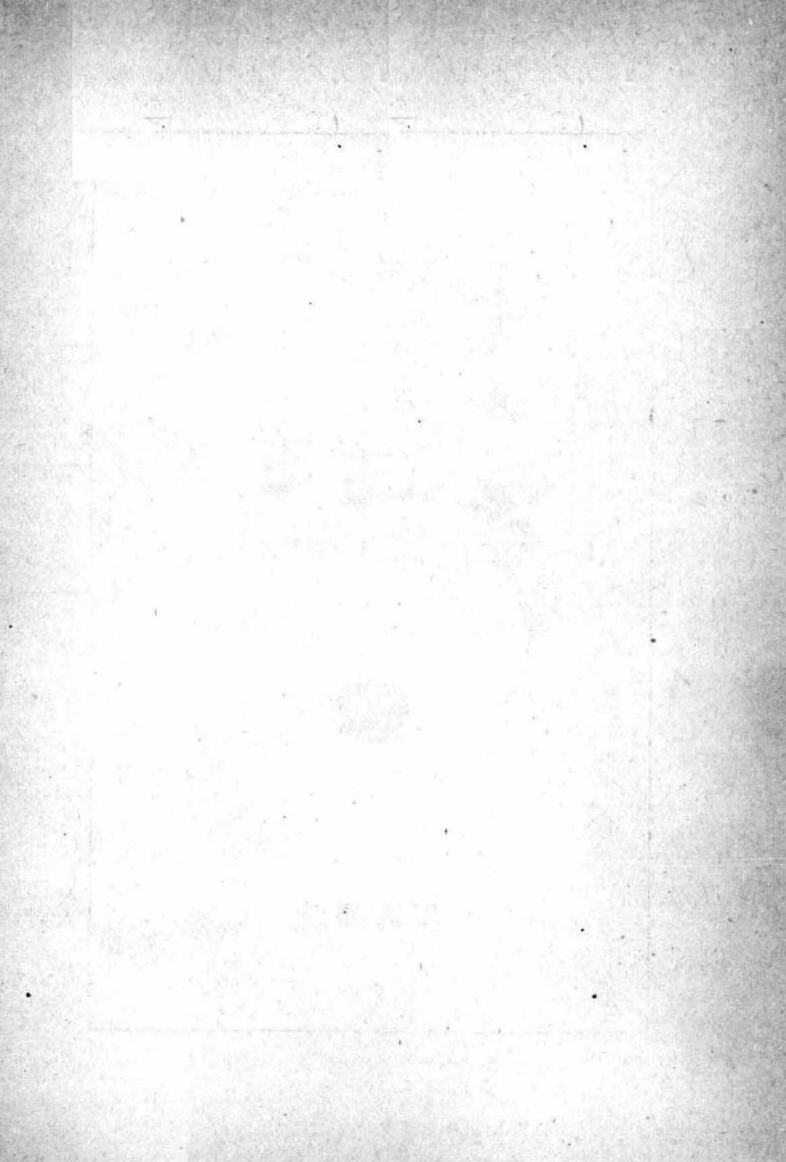
男 や も め

他一篇

シュティフター作

加藤一郎譯

岩波書店



目次

秃鷹

夜の圖……………七

晝の圖……………三

花卉の圖……………三

果物の圖……………三

男やもめ

一 對照……………四

二 和合……………四

三 別離……………六

四 徒歩かちの旅……………五

五 逗留……………一〇

六 歸還……………一二

七 結 末

.....

一六

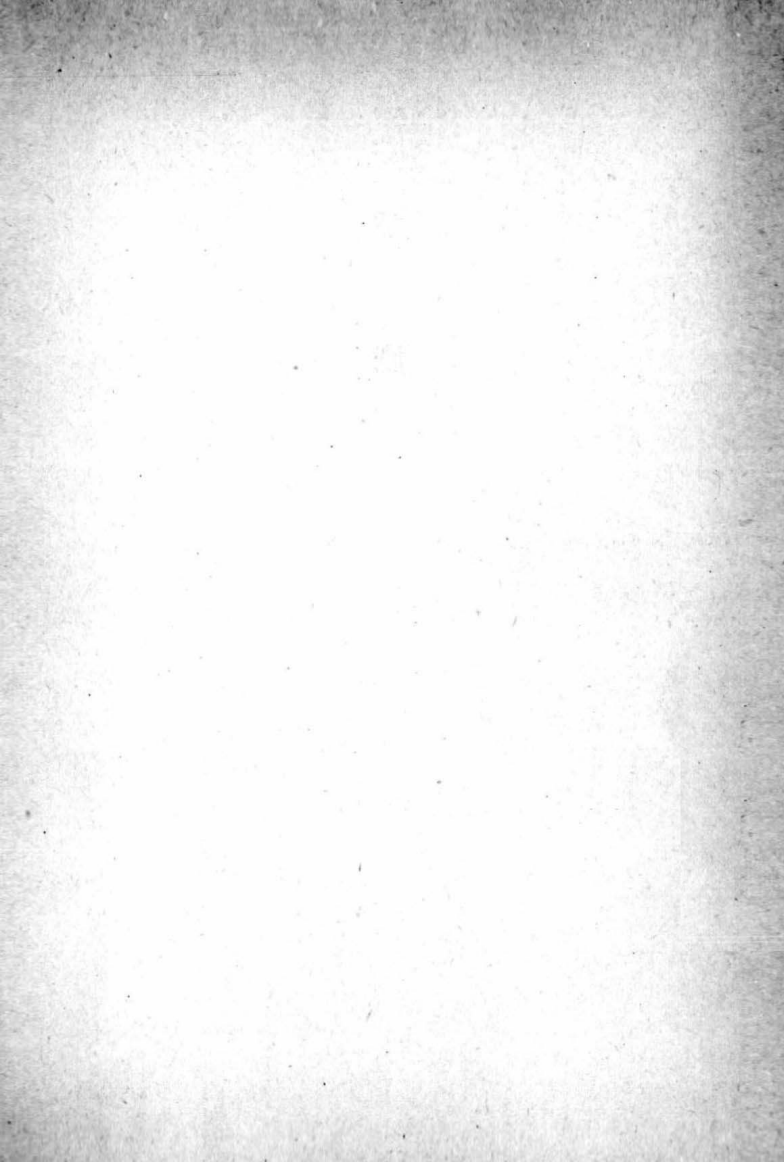
解 說

.....

二〇

禿

鷹



夜の圖

美しい六月のある月夜が更けて二時頃のこと、牡猫が一匹屋根の棟をつたつてゆき、月にみいつてゐた。月光を斜めにうけた片方の眼はみどりの燐のやうに輝き、もう一方は流しもの瀝青の如く眞黒である。やがて屋根のはづれまでゆきつくと、眼をみはつてひとつの窓をのぞきこむ——丁度そこから僕は外をみてゐた。つぶらな親しげな兩方の目玉を僕の方へ釘づけにしたまま、訝かしさうに訊ねかけたい様子であつた。「親愛なる遊び仲間よ、同室の友よ、これはまた一體どうしたといふのかね？ 今日にかぎつてこの夜更けの闇へ窓から顔をつき出してゐるなんて。いつもなら、我輩が夜中の散策にたまたま通りかかつてのぞきこめば、君の顔はいつもあかく健康さうに、眞つ白な枕の上で靜かにまどろんでゐるといふのにさ」

「うん、わが親しき友よ」と僕は彼の沈黙の間に答へていつた。「とにかく時世もひどく變つたといふもんだよ、さうだらう？ 白い枕はあすこの寢臺に皺もつかずにおいてある。そして満月が、僕のまどろむ顔を照らすかはりに、可愛らしくちらちらする窓硝子の影をその上に多がいてゐる。僕はかうして窓べりで顔を闇にむけて、すでに夜も四半時をあますばかりだといふに、じつと空をみつめてゐなければならぬ。あの空に今夜は未曾有の珍奇な、たまげるやうな星が現はれようとしてゐるからだよ。光こそ發しないけれど、もし功績から判斷すれば、その星のうちには月やすべての星をあつめたよりも、お前のそのびかぴかする目玉を勘定にいれたよりも、

もつと燦爛としたものがあるんだよ。お前」

およそそんなふうに僕は牡猫にいつたのだが、彼は僕の話がのみこめたやうに、もう一度ぐつとみひらいて親しげに僕にむけた彼の眼をまるで雲母板みたいに光らせ、僕が撫でつづけてやるうちに、柔らかな毛肌の片側を僕の手の方にぐねらせて軀をあづけながら、ごろごろ咽喉をならしはじめた。「ながい月夜にはたくさんのことを見るものだ。そもそも観察眼といふものがお前にもあるのなら、それはお前も知つてゐるだらう。だがねえ、僕は知らなかつたんだよ。こんな心をとめてみつめる暇がつかつたもんだから。でもかうしてじつと動かずに空をみてゐてさ、殊に待つてゐる天體が一向に現はれてこないもんだから、春の夜のうつりゆくさまを究めるゆとりがたつぷりと持てたよ」

さてここで僕がわが親しい友の牡猫ヒンツェにうち明けたことはみんな眞實なのだから、いつかこの紙片がその眼にふれることのあらう一そう親しい人間の眼にも、なぜこれを開陳してならない筋合ひがあらうか。まつたく途轍もなく不幸な運命が僕をこの窓に繋ぎとめ、僕の眼を夜つびて空のかなたに縛りつけた謂はれをなぜ話してならないといふのか、僕はその理由がさつぱり納得できないのだ。まるで馬鹿げた次第にちがひないのだけれど、僕がしたやうな體驗をこれまでにした人だつたら、誰しもこの高いところで僕の傍に坐ることだらうて。

時間の進みかたは鉛のやうに粘つくく遅々としてゐた。遺憾ながら、僕の昇つてきかたがあんまり早すぎたのだ。まだその頃には暮れがたの不快な人のざわめきが街路に流れてゐて、すでに

彼方の大きな二本の煙突のあひだから、薔薇色がかつた紅い顔をのぞかせて僕の兩窓に會釋を送るなつかしい月と奇妙な不調和をなしてゐたのである。

でもやがて追々に人間と名のつくものは、ことごとく彼等の夜の蔭にくるまつてしまひ、ただ夜更けに家路をたどるのんだくれ達の喚き聲だけが、ときをり上までひびいてきた——そのうちに、哲人、詩人そして牡猫どもの愛する例の刻限、夜の靜寂がはじまつた——僕の四脚の友は、彼の散策の時刻について、まさに悪からぬ嗜好を持つてゐるといふものだ。月はつひに屋根を離れて天心高くに懸つてゐた——ひとつのひかり、きらめき、かがやきが隈なく大空を貫ぬきはじめた。あまねく雲をさし通す銀光、亜鉛張りの屋根といふ屋根から幅ひろい銀の流れが滴りおち、避雷針と屋根の尖端、塔の十字架には火花が散つてゐた。美しい銀の靄が、幾十萬のまどろむ心に蔽ひかけた薄巾のやうに、ひろびろとした町の屋根の上へひろがつてゐた。銀の海にぼつりと浮かぶ金色の一點は、貧しい洗濯女の住むかなたの屋根裏の小部屋に點るラムプの灯、その子供は瀕死の床に臥してゐるのである。

すべてがいかに美しかつたとはいへ、時の經つのが一刻毎にもどかしくなつてきた——煙突の影はとつくに反對側へ移つてゐたし、まるい銀の月はすでに暗い弧道の下半分にまはつて傾いてゐた——死のやうな靜寂さである——目覺めてゐるのは、ただ僕と、そしてあのラムプの灯ばかりであつた。

しかも僕の求めるものは現はれなかつた。

ヒンツェが二度屋根をわたつて行つたが、僕のところへは寄つてこなかつた。眼下の大都市は月光の幻妙な魔法にかかつて朦朧と深い夢路をたどり、その寢息がききとれさうな静けさである——しかし僕の眼がものを探るあたりの空も、ひとよさぢゆう、ひっそり輝きつづけてゐた。さらに僕は辛抱して待つた。刻々に静けさが深まつてゆくやうに思はれる。月は眼にみえて弧道の端へ傾いてゆき、南の空ひくく青い天の牧場に動いてゐた羊雲の群れがかすかに光を點され、夕方から西の空に低く静かにのびてゐた遙かな棚雲までも——こちらが夜になつてからも暫くアメリカ側の太陽の照返しにあかかつたのがすつかり褪めて、今は月に照らされ、仄かな蒼白い光が四肢の形にのびた雲間を流れると、さながらかすかに身じろぎするやうに見えた。

そのとき二時を打つのがきこえて、ヒンツェが姿を現はしたのだつた。今夜の僕には彼が大いにかかはりのある存在になつてゐた。そこで、この紙片のはじめに報告した僕と彼との沈黙の會話がおこつたわけだ。しかしいふまでもなく彼とのお喋りは長くはつづかなかつた。どちらも對談にはすぐ飽きて、めいめいの仕事にとりかかつたから。つまり彼は散策、僕は單調な觀望に移つたのである。

かれこれするうちに寡婦のラムプは消されてゐたが、そのかはり間なしにまつたく別のラムプがつけられるだらうと、それを僕は懸念した。といふのは、不審なうすあかりが、夜明けのあかるさのやうに、もう東の空に這ひひろがつてゐたから。それに今まであんなに温かく、死のやうに寂としてゐた空氣までもゆらぎ出した。すでに二度も東から吹いてくる冷氣を頬に感じたし、

春の谷間のせせらぎが山からはつきり傳はつてきた。

そのとき突然、長く棚引く雲の合間に明るくすけた一帯の空に、黒い圓形のものがゆらりゆらりと漂うてゐるらしく思はれた——すばやく僕は望遠鏡をひつ掴んで、その方角の空へふりむけた——レンズをとほしてきらきらする星と雲と空のかがやき——でもそれらにかまはず不安な氣持で搜すうち、たうとう僕はひよっこり大きな黒い球を探りあて、それをしつかり見失はぬやうにした。

夜

やつぱりさうだつた。まづこれでひとつの豫言はあたつたのだ。ほの白い薄明の空に、やつと桃の花ぐらゐのうすあかさに、すさまじく大きな黒い球がくつきり浮かび出て、氣がつかぬほどゆつくり上昇してゆく——その下には眼に見えぬ綱に吊されて、望遠鏡のレンズのなかではびくびく顫へ、ゆらゆら揺れながら、空中へひいた横線ダツシユのやうに小さく——カルタの札を曲げたやうな小舟こんぶねがついてゐる。それは三人のひとの生命を運んでゐるのだが、傍の雲から朝露が滴りおちるやうな自然さで、まだ黎明の來ぬさきに彼等をふるひおとすかもしれない。

あはれ血迷へるコルネーリアよ！ 神の救ひと守護まもり、汝の上にあらんことを！

僕は望遠鏡を除けずにはゐられなかつた。氣球に舟をつるしてゐる綱のまるで見えないのがだんだん怖ろしくなつたからである。

さて第二の事實もはじめのと同じに確かなことだとしたならば、いとしやわが胸、もうそれまで——そのとき汝は世にも愛すべく、勇ましく而していとも輕浮なる女を識り、これを愛した

といふことになるのだ！

だが僕はやつぱりまた眼鏡に手をかけずにはゐられない。しかしすでに氣球の影は見えなくなつてゐた。おそらく上の層雲に吞まれたのであらう。その雲の奥にそれらしいものの姿がかき消された。それから暫く僕は怵へて空を探したけれど、もうそれかぎり何もみつかりはしなかつた。

腹立たしさと不安の混りあつた奇妙な氣持で望遠鏡を置いて空をみつめてゐるうちに、たうとう別な灼熱の球體が昇つてきて、その放射する光線を晴れやかな大都市の上に、僕の窓に、そして爽やかに澄みわたる際限のない虚空に注ぎかけたのである。

畫の圖

鷹

その若者は——彼の日記から前篇の記事が文字通りに寫しとられたのである——ほんの駈出しの藝術家、ひとりの畫家で、まだ滿二十二歳とはなつてゐなかつたが、外貌からの判斷では精々多くみて十八といつたところだらう。未だにまるで子供らしい捲毛のままにふさふさと垂れた金髪のなかから覗き出た、云ひやうもなく誠實さうな顔は、白晳の膚に血色をうかべていかにも健康に溢れ、生え揃つたばかりの口髭を飾りものにつけてゐる。この髭は彼が頗る愛好するところのもので、子供じみた得意然たる態で上唇の上にちよこなんとしてゐる——童心の純眞さを宿す穩やかな額の下に、濃藍色を帯びた夢みるやうな兩眼があつた。事實彼は、彼の育つた森林地の

寂寥のうちから、谷間で育まれたあらゆる天真爛漫な心根と、齡相應な識見とを、この背徳の大都市まで持ち運んできたのであつた。

彼が上述してゐるあの奇妙な一夜が明けた朝、追々に暖かな朝日でいつぱいになる屋根裏の部屋で、彼は布製の古風な椅子の高い背に仰^{のけぞ}反るやうに凭^たれて掛けてゐた。椅子のたくさんな黄色い鉤に朝日があたつて、彼の身の周りをきらきら星の穹窿^{アーチ}がとり圍んでゐた。兩手をじつと膝におき、眼は前の畫架にのせた空白のカンヴァスをみつめてゐるけれども、繪のことを考へてゐるのではなく、眼底の深刻な沈鬱なひかりのうちには、甘く悲しく心に燃えはじめ、童顔の面へも險しく美しく現はれた愛情のきざしがひそんでゐた。白紙の上に大都市の最初の文字が——今ここに歡喜と不安にみつる熱烈なる生涯始められたり、彼が少年時代の平穩なる小島を遠く離^{さか}れて——と、標題の文字が書きつけられたのである。

愛は麗しい天使であるが、信じやすく欺かれた心にとつては屢々死の神の使者である！ 家主の小母さんの牡猫で、彼の夜の相棒をつとめるヒンツエは、ひろい窓闕にねそべり、朝の光を満身にうけて眠つてゐる。その場所から遠く離れぬところに望遠鏡が天使の繪の上に置いてある。下の通りでは、今日の飢餓と奢侈に備へる首都の産業がすでに騒音をたてはじめてゐた。

さてかうして金色の陽光が遂にいつぱいに溢れた狭い屋根裏の部屋で藝術家が坐つてゐるあひだに、ほかのある場所では別な場面が展開しつゝあつた。天空たかく涯しもない大氣の寂寞のうちに漂ふ輕氣球が、小舟^{こぶね}とそれに乗つた果敢な人間どもを、かすかな氣流のままに水もない大洋

を西へ西へと曳いて行つた。あたりは森閑と何の物音もなく、ときをりこの静寂を破るのは、東風がきて琥珀織の球壁を掠めるかすかな軋きみか、絹の索具のわづかに聞きとれる呻きばかりである。三人の者は一様に深い沈黙をまもつて舟に坐り、分厚な毛皮で頤まで身をつつみ、二重にした緑の面紗を顔にかけてゐた。そのうちひとつの面紗をすかして、つぶらな、利發さうな、おどおどする眼つきをした、美しく蒼白な女の顔のやさしい輪郭がほの見えてゐる——さあこれで、夜を徹して飛揚を觀た者の推測した第二の事實もほんたうになつた。しかしここに飛航する彼女には、あの勇敢なコルネリアらしい姿はもはや認められはしなかつた。同名のローマの女性のやうに己の性を超越しようと願ひ、その剛勇な息子達のやうに、被壓迫者の束縛を斷ち切る企てをこころみ、苛酷な男性が幾千年來異性の周圍にさだめた得手勝手な限界を脱して自由を宣うことが、一女性たりともなし得られるといふ實例を、——自由とはいへ、淑徳と女らしさを微塵も損はずに、すくなくともわが身をもつてうち立てようと欲した彼女だつたのだが——。半時も經たぬ前の彼女ともすつかり今は變つてゐた。萬事が、何もかもが、彼女の豫想したのとは全然相違してしまつたからである。

差出がましい觀察の眼を一切避けるために、飛揚は明けきらぬ黎明を期して行はれた。氣囊に瓦斯がつめられるとき、美しい少女は心臓を高鳴らせながらその場に居合はせた。そしてどきどき鼓動する胸を鎮めやうもなく、これから起らうとする出來事に對して心に湧く不吉な豫感をどうにもできないでゐた。目立たぬ琥珀織がみるみる膨らんで物凄くほどの球體になり、それを地

上に繋いでゐる丈夫な綱がびいんと張つたときは、周圍に立つてゐた參加者たちにも、もの怖ろしい一瞬に感じられた。異様な道具や機械が持つてこられて、舟の棚に締金で止められた。ひとりの眉目秀麗な偉丈夫が——いつもは穩やかで、快活で、機嫌がいいのに、今日ばかりは蒼ざめた嚴肅な面持で——幾度となく機械のまはり歩いては、あちらこちら機能の検査をしてゐる。最後に彼は女があくまでその願望を枉げないつもりかと訊ね、さうだと返事をきくと、怪しむやうな驚歎の眼つきでじつと女をみつめ、それから丁寧に舟の中へ案内しながら、二週間も前にしておいた警告を繰り返したりして彼女にうるさい奴だと思はれたくはない、今日までにおそらく十分に彼女がその警告について熟慮を重ねたのは疑ふ餘地もないからといふのであつた。さういつて、またもう二三分も待つてみたが、女の返答がなかつたから、そこで彼も乗りこんだ。ひとりの老人が最後にのつた。この男は學術上の老助手なのだらうと彼女は思つた。

これで一同の準備はできた、機械も好調である。曉の薄あかりの中に覆面してこちらを見てゐるやうな庭の木立に、もう一度コルネーリアは眼をなげた——すると彼女に付き添つた男の口から掛聲がひびいた。「それつ、雄々しき『禿鷹』^{コンドル}號をとばせつ！ 綱を放せつ！」命令が達せられた。そして氣球の巨體は眼にみえぬ多數の大氣の腕につかまれ押されてぶるぶると顫へたかと思ふと、一瞬ゆらりと大きく揺れた——すぐにゆつたり上昇しはじめ、小舟を母なる大地の面からひきあげると、一呼吸^{ひといき}ごとに速さを増し、しまひには矢を射るやうな速さで垂直に曉の陽の流れの中へつき入つてゆき、その利那球面にも綱具にもさつと朝日の焰があたつたさまに、コ